内村鑑三と進化論

藤田　豊

本稿では、信仰の深化とともに、内村鑑三の進化論に対する態度が変化する状況を概観し、進化論の様々な学説と聖書を、彼がどのように対応させたかをみることを主眼とする。

内村鑑三（1861―1930）は札幌農学校において、水産学を学び卒業後農商務省御用掛農務局水産課勤務中にも「日本魚類目録」を作成すると同時に、大日本水産会草創期の中心人物として活躍した。明治以降、近代科学の代表として人々に流布した進化論に対して、生物学者としての内村は、どのように対応したのであろうか。内村は札幌農学校において、キリスト教に入信するとほぼ同時に、進化論にふれた。内村自身「読書余録」に於いて当時を回想し、「科学熱は余に早くより起こりしものであつて、今も猶ほ残る者である、善き天然学者たらんことは余の幼年時代よりの野心であつた……科学書の中に永久に余を感化した者は言ふまでもなくダーウィン著『種の起源』である、余は数回反復して此書を読んだ、而して生物進化の理の何んである乎を知つた、余をして始めより基督信者であると同時に進化論者であらしめし者は実に此の書である、此書に由て余の思想の傾向は定まつたのである、天然は進化である、故に万物は悉く進化でなくてはならないとは此書が深く余の脳中に刻みたる真理である」（岩一六―五一〇）と語っている。キリスト教を攻撃する根拠として用いられた進化論を、キリスト者であると同時に受容した事は、彼の信仰そのものを考える上でも重要であろう。

なお、内村の著作引用に関しては本文中に出典を示した。略号は、「日」は教文館版『内村鑑三日記書簡全集』一九六四年を示し、「岩」は岩波版『内村鑑三全集』一九八一年をさす。また単行本を除く内村鑑三の著作の出典は断りのない限り『聖書之研究』である。『余は如何にして基督信徒となりし乎』（以下『余は如何にして』と略す）は鈴木俊郎訳の岩波文庫版、一九五八年を用いた。

一

内村鑑三の進化論に対する基本的態度は、「有神論的進化論」である。彼は「進化論に二種ある、無神論的進化説と有神論的進化説とである。天地萬物は惟り自から進化して行くと云ふのが前者であって、神は進化の順序法則に従ひて萬物を造り完成し給ふと唱ふるのが後者である。故に進化説は絶対的に無神論であると云ふのは間

違いである、神の御存在と御活動を堅く信ずる立場に立ちて進化説を維持することができる。」（岩二八―四二七）と、神と進化の関係について語っている。

有神論的進化論といっても、生物学的な進化論を積極的に肯定している点が、同時代のキリスト者と異なる。同志社系のキリスト者の進化論への対応と比較すると、彼らが『六合雑誌』『七一雑報』等に発表した意見は、宣教師の影響下にあって構築された弁神論的傾向を強く有するのに対して、内村は同じ有神論の立場には立っているが、宣教師の助けを受けず、より生物学の成果を積極的に受け入れ、科学の扱うべき問題は科学で、信仰の問題は聖書でという基本的姿勢を持っていた。(1)

「基督教と進化」において、内村は「今の世に在て、進化の辞ほど多く濫用さるるものはない、すべての進歩は進化と見做され、真理の闡明までが其進化であるやうに考へられる、進化の辞たる元々宗教や社会学に於て始つた者ではない、生物学に於て始つた者である」（岩一五―四三九）と、生物学的進化論と社会科学的進化論を区別せずに、安易に進化論が人々に絶対の真理のごとく口にされることを戒めている。

その内村自身も、ダーウィンの『種の起源』によって「余は始めより進化論は基督教の敵でないことを認めた、否な、基督教は寧ろ此学理に準じて解釈せらるべき者であることを知覚した、故に余のオルソドックス主義は始めより異端の傾向を帯びて居つた、余は始めより宣教師の基督に服従することは出来なかつた」（岩一六―五一二）（「読書余録」）と大胆に自らの過去を振り返っている。この態度では、自らが戒めていた点を忘れ、進化論を生物以外の対象を考察する道具として用いることになる。このように、内村自身の進化論に対する態度も現在の生物学的水準から見れば、非科学的であり問題が多い。この点において科学者内村の限界があると指摘することもできよう。だが、当時の科学者の内にも進化論を文明論と結び付けて考えなかった者は希有であり、内村が進化論の原典として考えていたダーウィンにもその傾向はあった。内村の発想も時代的な状況を考慮すれば非難することは酷であろう。

内村の進化論に対する態度は「有神論的進化論」という基本的基調は一貫しているが、科学と信仰の関係は常に平衡を保っていたわけではなかった。一例を示せば、進化論の重要な原理である自然淘汰の原理について、内村は主著の『求安録』の「忘罪術　その二　利欲主義 Hedonism」初版（一八九三年）において「生存競争の理は生物発達の解明として最も満足なるものなり。」（岩二―一七四）と述べていたが、『内村全集　第壹巻』（警醒社、二〇六頁）発刊時（一九一九年）の改稿で生存競争に対する記述を「少なからぬ値を有す」と改めていることからもうかがえる。彼の進化論に対する態度は生物学上の新たなる学説や、ベルクソン等の哲学者の登場、そしてなにより内村自身の信仰の深化によって変化が見いだせる。

入信から渡米（一八七七―一八八六）までの時期、内村が公に発表した著作の中で進化論にふれたものは一八八三年の「空の鳥と野の百合花」（岩一―三九五）（『六合雑誌』）で『種の起源』を評価し、キリスト教と矛盾しないことを述べている程度なので、彼の回想・書簡等から考察してみよう。内村は、「読書所感」において、自ら

の読書の傾向の経歴が、天然学、歴史、文学、宗教研究、聖書研究、聖書と移っていった経過を述べる中で「余は宗教研究に移つた、余は哲学と神学とを避けなかつた、ダーウヰンの進化論を以て基督教を説明し見ばやと欲ふた」（岩二〇―三〇）と当時を回想している。また一八八二年一月、友人宮部金吾に宛てた書簡では「僕は今進化論に熱中している、経済が許せばたくさん本を買いたい。もし宮部君がその『人間の由来』と『ダーウィン主義』とを安い値段でゆずってくれることができれば実にありがたい。宮部よ、もし進化論に関する安い本を書店で見つけたら、ドーか僕のために買っておいてくれたまえ。僕は聖書は進化論で麗しく説明できると思う。願わくは僕が、進化論は無神的のものではなく、その計画は永遠にまでひろがり、あらゆる時代を通じて変わらざるところの全能の神の一大論題たることを証明し得んことを」（日五―二六）と彼の当時の夢を率直に語っている。

聖書を進化論で説明したいという内村の願望が最も直接的に語られているのは、渡米中、医学を志すか、アマスト大学に行くかで悩んでいた際に彼の同郷の先輩、新島襄に宛てた書簡である。内村は「聖書は、聖三位一体とは別の三位一体　人と、天然と、聖書自体との三位一体を具現しているように思われます。それゆえ小生の志望は、神が人を造りたもう道は、宇宙を造りたもうそれと同じであることを立証することです。人の精神的発達はその身体的発達に一致し、それはまた、アメーバから人間に至る動物の発達に一致し、それはまた、混屯状態から現在の美観に至る地球の発達に一致し、それはまた、原始の星雲状態から星辰体系に至る発達に一致します。同様にして、宇宙の自然史と人間の精神史を研究することによって、世界の進歩の跡をさぐることができるし、と小生は考えます。……大それた野心だ、日本の若い科学者には荷が重すぎる、と先生は言われるかも知れません、しかし新島先生、小生は自分の根拠について確かな確信を持っています。（ああ！小生は先生に自分の夢を語っているのです。）」（日五―一六七）と述べている。内村の発想の中に科学者として、生物科学的進化論による聖書の記述の解釈を目標とする意向がうかがえる。さらに生物学的世界を敷衍して宇宙論にまで至る「大それた野心 A grand ambition」がこの当時より彼の心に宿っていたことが解る。

この時期の姿勢を彼の入信過程に照合すると、『余は如何にして』で展開していた八百万の神々を信じる矛盾に満ちた宗教的生活に思い悩む少年時代を、キリスト教に入信する事により脱し、「唯一神教は余を新しい人とした。余は豆と卵（たちもの）を再開した。余は基督教の全体を悟ったと考えた、それほどに一つの神という観念は感激的であった。新しい信仰によって与えられた新しい霊的自由は、余の心と体に健全な感化を与えた……余は山野を跋しょうし、谷の百合、空の鳥を観察し、天然を通して天然の神と交わらんことをもとめた。」（二六頁）という態度から、さらに一歩進み進化論により科学的に聖書を分析し、自己の内に神と天然の関係を説明し得る新たなる世界観（宇宙観）を構築することへと発展していったと言えよう。

二

内村は『余は如何にして』（一五三頁）において、アマスト大学に赴く理由を、シーリー一人に会うことであると述べている。内村が渡米前シーリーの著作から想像していたシーリーへの興味は、彼の敬虔と共にその学識にあった。具体的には、内村はシーリーの学問的関心が進化やエネルギーの保存ということに占められており、彼からそれらを学ぶことによって、先に新島襄に語った彼の神学（大それた野心）を完成することを目的にしていたのだ。しかし、内村の予想に反して、はじめて面会した時から徐々にではあるが確実に彼を贖罪信仰へと導き内心の真空を埋めてくれたのである。

『余は如何にして』にあるごとく、内村は入信する際にも強制され自分の意志に反して「イエスを信ずる者の契約」に署名をしたのだが、シーリーとの出会いも、夢の解決をめざして入学したアマスト大学で、シーリー自らの手によって、予想に反して贖罪信仰に導かれたことになる。

その後は、一八八六年一一月三日アマストより宮部金吾に宛てた書簡おいて「聖書と生物学とを調和させる夢なぞは僕の心から消えてしまった。人の霊魂の回心という事実は『原生体』などと結び付けて取り扱うには、あまりにも厳粛である。僕は、進化論によってキリスト教を証明しよう、との過ぎし日のロマンチックな空想を僕の心から取り去らねばならない。キリスト教の事業は、肉体と精神の一切の物とを、完全にそのためにささげることを要求する。」（日五―一九三）と述べているごとく、内村は生物学により聖書を説明することを人生の目標にすえることから、自ら直接キリスト教事業に参加することに帰国後の目標を変更したのである。

内村の進化論に対する態度の変化には、彼を導いたシーリーの進化論に対する態度が影響していることは充分想像できる。大山綱夫氏によれば内村が学んだ当時のアマスト大学の学長シーリーは「『ジョンソン新世界百科辞典』でユーマンス（E. L. Youmans）のダーウィニズム解説に対して批判的解説を書き、さらに一八七九年から翌年にかけてインディペンデント紙上及びオブザーヴァー紙上でダーウィニズム批判を続け、根拠のない推測を科学的真理として教える訳にはいかないと述べ、アマースト・カレッヂでダーウィン進化論が教えられていないと公表した」（「シーリーのアマスト・カレッジと内村鑑三」『内村鑑三研究』八号三五頁）というダーウィン等による進化論に真っ向から反対する態度を示していた。シーリーがなぜダーウィンの進化論を否定しているかは“A Critism of the Development Hypothesis”(1888)によって見ることができる。シーリーのダーウィン批判を要約すると、種の起源と生命の始源は三千年前から人類に興味ある問題だが、非常に難解であり鋭敏さと豊かな包容力を兼ね備えた視野が必要だと前置きし、以下、種の変移（Transmutation）がいまだ観察されていないこと。地質学的資料が種の変移証拠とならないこと。地質学的観点からみてダーウィンの自然淘汰説に矛盾があること等、当時の科学水準でダーウィンの進化論と矛盾する点を述べ、最後に生物学を離れ、人間の文明が自ら進化前進してきたというダーウィンの説に対して、人類の歴史上人間性には自らを改善して完成に近づけようという例は一つもな

く、発展した時には、人類の背後にあるもう一つの存在（神）の灯によると述べ生物学的進化論も、神を除く進歩史的な歴史観も同時に否定している。（『内村鑑三研究』一一号　翻訳「進化仮説に対する一批判」大西直樹訳）

内村はシーリーの進化論に対する態度に納得したわけではない。内村は「ロマンチックな空想」は捨て去ったが、彼のなかには依然として、「僕は人の霊魂の救いに貢献せぬ知識は、貴重な知識だとは思わない。すべての真理は神の真理であるから、死んだ石さえ神の愛と善とを証明し得ると信ずる。僕は夢のような、精神的な聖書解釈法をきらう。しかし植物学であれ、動物学であれ、その他何であれ、あらゆる知識をもってする聖書の解明を僕はあこがれ求めている」（日五―一九七）（宮部金吾宛て書簡一八八七年二月）という面が残り続けている。新島襄に語った聖三位一体とは別の三位一体（人・天然・聖書）を安易に語ることはしないが、「天然と歴史と聖書とが、人類に与えられた三脚たる」（日五―一九一）ことに関心を持ち続けアマスト大学の中でダーウィンの進化論を仮説として受け入れていたエマソンの地質学を興味を持って学んだのである。『余は如何にして』において内村は「余はけっしてこの教授に如何にして創世記と地質学とを調和せしめたのかを質問しなかった」（一五七頁）と述べているが、内村の興味が依然として、この問題から離れていなかったことを裏付けていると言えよう。

三

帰国後の内村の進化論に対する発言は、彼の最晩年の回想「信仰復興のきざし」にあるごとく進化説が連戦連勝の時代に聖書的信仰を守るために、『六合雑誌』等において、「天然科学に拠つて私の基督教信仰を守る」（岩三二―三〇五）ことを目的にしたものであった。「理想的伝道師」においても、彼は「生物学に暗き伝道師にして如何程ダルウキンの変還論に反対するも世人は其議論に服せざるなり」（岩一―二六六）と、生物学的知識の重要性を説いている。

内村は進化論とキリスト教の関係を、具体的には『宗教座談』（岩八―一五六）等で展開している。要点をまとめると、ダーウィン等の生物学者も敬虔なキリスト教信徒であり、信仰を科学の上に置くことにより、科学とキリスト教は、両立できるということ。科学の問題は科学で解き、信仰の問題とは別問題であり、その面で、聖書の記述と科学は矛盾しないという主張が中心であった。

彼が積極的に進化論を評価する場合は、リバイバル（信仰復興運動）による熱狂的な入信を否定する原理として、『求安録』（岩二―一五一）『余は如何にして』（九九頁）等で示したダーウィンの進化論が急変説を否定していることを根拠とする時や、非戦論の正当性を裏付けるために「もし進化の理が今日直に無に帰すならいざ知らず、宇宙と人類が其今日まで取り来たりし経路に由て進みますならば戦争は終に必ず廃まります」（「非戦論の原理」）（岩一六―二七）と述べる時など、自説を説明する根拠として進化論を強引に用いる時であった。

帰国後の内村と進化論の関係の推移を考えるには、ダーウィンに対して内村がどのような姿勢を示しているかを見ることが有効であろう。帰国後、内村はダーウィンの進化論、特に自然淘汰説に関し

て、「生存競争の理は生物発達の解明として最も満足なるものなり」（前掲『求安録』）という高い信頼をよせていた。また、ダーウィンの『人類の起源』に示された、人類が下等な生物から進化し、知能や道徳も人類の歴史に従って進歩して行くという発想も、積極的に受け入れていた。当然ながら、科学の成果を受容すればする程、内村は聖書の記述と進化論の間にあって、苦悩しなければならなかった。表面上は『求安録』等で、生存競争の理が生物発達に関しては有効であるが、社会現象について、スペンサーが主張した生存競争の原理だけによって説明することを否定し、贖罪信仰によってのみ人は平安を得られることを強調する態度をとっている。

しかし、内村は一八九二年一月のベル宛書簡において、本郷教会で、英語バイブルクラスを担当し創世記を講じることを伝えるなかで、「創世記は恐らく私が聖書のどの書よりも遙かに多く研究し、思索した本です……創世記の初めの三章（chapters）に関しては、私自身あらゆる恐るべき懐疑を経験して来ましたが、感謝すべきことは、自分がいだいたことのないような疑問には一度も出会いません」（日五―二三六）と科学と聖書の記述の間で苦悩した心の内を吐露している。

内村が一九〇〇年『聖書之研究』を創刊するにあたって書いた「本誌の性質」で、彼は「聖書は過去の記録なれども実は今日の書なり、死せる書の如くに見ゆれども実は最も活ける書なり、是れに歴史あり、然れども是れ過去の出来事を伝へんが為めにあらずして、人類の進歩歴史に於ける神の直接の行為を示さんが為なり、是れに科学あり、然れども是れネチュアの配列進化を教へん為めに非ずして、天と地と其中に存する総てのものに現はれたる神の聖旨を伝へんが為なり。……聖書を識るは歴史と天然と文学との泉源に達する事なり。」（岩八―二八六）と述べている。彼にとって『聖書之研究』は、心に暖め続けてきた「人と、天然と、聖書自体との三位一体」（前掲、新島宛書簡）の関係を、聖書を中心に据え本格的に日本人に向かって語り始めるものであったと言えよう。

内村は『聖書之研究』創刊と同時に創世記の註解を開始し二年にわたって詳細に一章から八章を人々に説いた。後に『洪水以前記』として単行本にまとめた彼の自信作である。彼が、聖書研究の事業の第一番目に「創世記」を取りあげたことは注目すべきであろう。内村は進化論と聖書の関係を、例えば「創世記」の二章一五節以下の女性の創造を注解するなかで「雌雄両性の分化（differentination of sexes）は生物学上の大問題なり……両性の全く分離するは之を比較的上等動物に於て見るを得べし、故に若し進化論の提議にして誤りなくば（而して余輩は其大躰に於て之に賛す）人類に於ける男女の分化はその創造以前に於て成就されしものならざるべからず」（岩八―三七〇）と、生物学的視点から聖書の記述に関して否定的見解を述べている。シーリーを含めて弁神論的に聖書と進化の関係を説明しようとする当時のキリスト者の多くが、ダーウィンの進化論があくまでも仮説に過ぎないことを強調するのに対して、内村は生物学的にダーウィンの進化論を受け入れ、聖書は人間を救いに導くために表されたものであることを述べ、その意味に於いて聖書の言葉を受けとめるべきことを強調している。(2)

内村は生物学上の認識と信仰の問題を明確に区別すべきことを主

張する。しかし、内村は神が天地を創造した後も神の摂理ははたらき続けていると考えていた。よって、自然淘汰も当然神の摂理ということになる。種個体群の中に環境の影響をうけて優劣の個体差ができ、そのうちで優れたものだけが生き残るという自然淘汰に、いかなる神の摂理が隠されているのかは、自然淘汰を科学的に受容した内村にとり、大きな問いとなり続けたのである。結論から言えば、彼の信仰の深化と共に、自然淘汰説は徐々に多くの学説のうちの一つという態度へと転換してゆき彼の精神の調和がはかられていくのであるが、その道はけっして平坦なものではなかった。彼の言葉によってその変化の跡を辿ると、一九〇九年四月「信仰の自然淘汰」では「自然淘汰は天然の法則なり、天然の法則なるが故に亦神の法則なり、神は此法則に循ひて万物を完成し給へり、彼は又此法則に循ひて信徒を完成し給はざらん耶、弱き者は滅び強き者は残る、言ふを休めよ、是れ無慈悲なる法則にしてキリストの法則に非ずと、キリスト御自身は言ひ給へり、それ有てる者は与へられて尚ほ余りあり、有たぬ者はその有てる物をも奪わるゝ也」（岩一六―二七七）と、「マタイ伝」一三章十二節を引用し、自然淘汰は神の摂理であることを強調し、同年七月には今度は全く正反対に「キリストは如何なる意味に於て万物の造主なる乎」において「『宇宙は犠牲に由りて成る』（黙示録一三―八）とのことである、即ち所謂天然の法則なるものは暴力でもなく圧制でもなく、其原理は小羊即ち犠牲であるとのことである、……宇宙を盲力の衝突と見るのは大なる誤謬である、良く之を解すれば宇宙其物が大福音である、天然は腕力で福音のみが恩恵を示す者であると云ふが如きは極く浅薄なる宇宙観であつて、又極く浅薄なる聖書知識である」（岩一六―四一八）と述べ、以下この立場に立つ人物として、ワーズワース、ブラウニング、ジョン・フィスク、ルコント、クロポトキン等をあげ、自然淘汰だけによる宇宙観を否定し、キリストの愛を中心とする宇宙観を肯定している。

内村がこのような宇宙観を積極的に語り始めた理由の一つとしてアレニウス（1859―1927）の影響を考えてみよう。内村は『聖書之研究』の読者、葛巻行孝に宛て、アレニウスを「ダーウィン以来曾て在らざりし大思想家」（岩三七―三〇九）と高く評価している。アレニウスは電離説でノーベル化学賞を授賞した科学者であるが、内村が注目したのは彼の「宇宙生命充実説」であった。内村は「瑞典国の学者スヴァンテ・アルレニウス氏宇宙生命充実説を唱へて学界の歓迎する所となる、其説く所に循へば一英寸の六百二十九万七千六百分の一以下の生的細胞全宇宙に充満し、光線の推す所となりて球体間を往来し、其熱して生命受くるに足る者あるに遇へば之に降て生物を発生すと、是れ実にパウロの所謂『夫れ我等は彼（神）に在りて生き又動き又存ることを得るなり』との真理を科学の方面より唱へし説ならずや、生命は僅かに地上に存し、虚空は無涯の墓地なりとの説は今や学者の破棄する所となれり、生命は宇宙に充満す、死は不可能なり、生命不滅説は今や科学的に証明されんとす、喜ぶべきにあらずや。使徒行伝十七章二十八節。」（岩一六―四二九）と高く評価している。この時期『聖書之研究』誌上において内村は聖霊や霊魂の問題に取り組んでいたが、彼は直感的にアレニウスのなかに自らの宇宙観に対する科学的根拠を発見したのであろう。「宇宙

生命充実説」の文脈で内村の「キリストは如何なる意味に於て万物の造主なる乎」で展開された宇宙に関する説を読み返すと、その内容がアレニウスの宇宙論的な考えによっていることが解る。

一九一〇年一月の『聖書之研究』「天然号」はこの意味で注目に値する。内村の信仰と天然の関係はあくまでも聖書を主とし、天然を従とする姿勢で貫かれていたが、その均衡関係が一時的ではあれ、崩れたのもこの時期である。彼は別所梅之助に宛てた手紙の中で「天然の中にキリストの福音が顕はれて居るやうに思はれ、聖書の価値が少々価値が減じたやうに思はれ、少しく閉口致し居り候」（岩三七―三三二）と語り、自らの状況を聖書から離れるものとして問題視している。「天然号」の主論文「近代における科学的思想の変遷・喜的宇宙観に傾く」（岩一七―八四）の内容は、進化論との関係で見れば「進化は或る理想に向ての進歩である。」という彼の一貫した態度が示されている。優勝劣敗（自然選択説）を相対化し天然には「共済の理」も存するという主張も、「キリストは如何なる意味に於て万物の造主なる乎」（前掲）の論旨から逸脱していない。文書全体を見渡しても、宗教と科学の関係が、内村の入信した当時は対立するものであり、科学者が信仰を持つ場合、密かに持つ必要があったが、近年科学と宗教は共存し人類を導くものになってきたことを喜ぶことがその主題になっている。

彼が「喜的宇宙観に傾く」ことができた原因は、先に見た「宇宙は完全なる有機体なるを見認めて、神の存在を否定し能はざるに至つた」といった宇宙観であろう。問題にすべきは、この宇宙観が聖書にも増して内村の心をとらえた点である。彼の内面において信仰と科学の調和が一時的ではあれ崩れ、科学問題が聖書の価値を減じさせる程に魅力的になったのである。彼にとり、聖書の科学的説明とは、終生こだわり続けた命題だったのである。

前年の「年を終わるの記」においても内村は「大なる歓喜の理由がある、それは来世の存在が愈々明らかに成つて来たことである、余は人の不滅は今や証明されたる真理であると思ふ、若し進化論が学術的に証明されたる真理であるとならば、来世存在説は進化論より遙かに固く証明されたる事実であると思ふ」（岩一七―七四）と進化を相対化する論理を得たことを喜んでいる。

四

内村が徐々にダーウィンの自然淘汰説による生物の進化を相対化し、多くの学説の中の一つであるという姿勢へと変化して行くのは、アレニウス等に注目する一九〇九年頃からと考えてよかろう。しかし内村は依然として生物学的な進化論を根拠の一つとしたアマストのモースより学んだ「歴史は人類進歩の記録」という進歩史的な歴史観をいだき続けていた。

先にシーリーがダーウィニズムを批判する際に、人間の文明が自ら進化前進してきたというダーウィンの説に対して、歴史上人間には自らを改善して完成に近づけようとした例は一つもなく、人類の発展は、人類の背後にある神の灯によると述べたと紹介したが、明治維新による急激な文明の進歩を経験した内村と、南北戦争を経験したシーリーの文明観に差異があったことも見逃してはなるまい。内村は生物学的な自然汰淘説を神の摂理として認めたと同時に、ダ

ーウィンが『人類の起源』で示したような人類の進歩も、ジョン・フィスク（1842―1901）等を拠り所にして、同列に受容したのであった。彼がこの歴史観と決別しシーリーと同様の歴史観を抱くのは、再臨信仰を獲得する時であった。

一九一六年、内村は「欧州戦争と基督教」の再臨を語る文脈で「基督教は人類の進化、社会の自然的発達を唱へざることを、陸軍と海軍と、政治と外交と、美術と文学と、経済と法律と、宗教と神学と総合的結果として黄金時代が地上に臨むとは聖書は何処にも教へないのである、其反対に人類社会の堕落を教ふるのである、暗黒の増進を伝ふるのである、而して最後の大審判を宣ぶるのである、而して審判後に於けるキリストの国の建設を伝ふるのである、注意して新約聖書を読みし人にして此明白なる事実を見逃すべき筈はないのである、然るに如何ぞ基督教会全体は此事実に眼を留めないのである、或ひは又留めて之を軽く視るのである、而してダーウィンやスペンサーやヘッケルの言に耳を傾けて社会進化説を唱へ、基督教も亦之を唱ふる者なるが如くに教ふるのである、而して今回の戦争の如き者起こりて人類進化説が其根底より覆へさるるや、基督教其物が覆へされしやうに思ひ、大に周章狼狽きて自己の信仰をさへ疑ふに至るのである。」（岩二二―四〇三）と述べている。この発言には以前の「歴史は人類進歩の歴史」という人間の未来を肯定的にとらえる視点は微塵もない。内村における歴史観の転換が再臨説を獲得することによって形成されたことは多くの先学によって語られているが、神の再臨によってのみ人類の救済が行われるという歴史観に転換することと、自らが真理として脳裏に刻み込んでいたダーウィンの自然淘汰説との関係はどのようになっていたのであろうか。

一九一七年の「天然的現象として見たる基督の再来」において内村は「生物学上に於ても近来の進化論は俄然的進化を認むるに至つた、ダーキンの説によれば何事も急変を許さず唯徐々として恰も氷河が岩角を切り砕きつつ遂に谿谷を造るが如くに進むのみである、然るに近頃和蘭の学者ドウリースの研究によれば徐々的変化の外に急変的進化ありて天然物を造出すには後者却て力ありといふ（突然変異）（mutation theory）、故にパウロがダマスコへの途上に於ける一日の経験に由て忽ち回心したるが如き、或は余が四十年の信仰生活の後一朝にして再臨信者となりたるが如きも少しも怪しむに足りない、新現象が突発する事は決して天然の理法に背かないのである、而して神は或時に至り急激に全世界を改造し給ふのである。」（岩二四―二一六）と述べている。この発言で注目すべきは、内村が、生物学界において二〇世紀初頭、メンデルが再発見され、ド・フリーズ等が遺伝学を進化論に応用し、「自然淘汰説」に対する「突然変異説」を提唱したことに注目している点である。彼は今まで信じてきたダーウィンの自然淘汰による漸進的な進化から、突然変異による進化を認めるという大きな転換をむかえたのである。この時に際して、自らの内に生じた再臨説を、突然変異証明の材料とする姿勢は、『余は如何にして』において、自らの人生を生物学的観察の主題に据えた内村らしい。

進化論と内村の関係を考える時、ベルクソンの登場にも注目すべきであろう。ベルクソンが日本で流行したのは、一九一三年頃からで内村の晩年に位置する。内村の文章には一九一二年ころからその

名前が出てくる。一九一七年の「エマオの出来事」でベルクソンに対する彼の興味を考えるなら、近代哲学に於いて「学問と信仰は常に敵対し、その和合は非常なる難事であった。しかるに近来に至り学者の態度は一変した。ダーウィン、スペンサー、ハクスレーら不信の学者は去りて、キリスト教の味方たるオイケン、ベルクソンらがこれに加わった。」（岩二三―二四八）という文章から推測すると、ベルクソンが哲学の立場から実証性を重んじて科学を統合し、さらに形而上学に向かった点に注目したのであろう。内村は若き日の彼が考えていた科学の立場から宇宙を語る事が、学問として許される時を迎えたことに対し喜んでいるのである。一九一八年「馬太伝に現はれたる基督の再来」において「現代の大哲学者ベルグソンの教ふる処に由れば生命は無限に変化し進化するといふではない乎、生命の発展何処に至る乎之を予想する能はず、人は人以上の者となり宇宙は漸次霊化すべしとは彼の主張ではない乎、されば進化の終極に於て以賽亜書の預言の文字通に実現すべき事も亦学者の立場より見て之を斥くる事が出来ないのである、知るべし、基督再来の一笑に附すべき迷信的教義にあらざることを、碩学の其真理を認むるあり、我等は敬虔の態度を以て其研究に当るべきである。」（岩二四―九一）と述べ、進化と再臨を結び付ける根拠としてベルクソンを紹介している。[3]

内村が進化論を相対化してゆく過程については、先にも述べたが、一九二二年の宮部金吾宛書簡では、「聖書とダーウィンの進化論は科学的に考察して聖書の方が真理である」（岩三九―一三）と述べている。内村が生物における進化そのものを否定したのではなく、ダーウィンの進化論における漸進的進化や自然選択説に疑問を抱いていると考えるべきであろう。内村において、進化に関する学説がダーウィン一辺倒から、多くの学説のうちの一つという見方へ変化したのである。[4]

内村はその後も進化そのものは確信している。事実、彼は一九二五年に「今日の進化論はスペンサー、ハックスレーの時代のそれと大分に異ふ。今や進化論と基督教とを同時に信ずるは少しも困難でない。造化の方法を見れば、至って簡単である、自分は常に唱えて言ふ、God worketh evolutionally（神は進化的に働き給ふ）と。自分は米国基督信者の所謂 Fundamentalist ではない事を告白する。」（岩三四―五一七）と述べている。

以上考察したごとく、内村は進化そのものに関して常に肯定してきたが、進化がどのように行われるのかという点に関する彼の考え方に推移が認められる。すなわち社会進化に関しては、「歴史は人類進歩の記録」という進歩史的思想から、第一次世界大戦を経験し、再臨信仰を抱き、人類の歴史は決して進歩しているのではなく、キリストの再臨によってのみ完成するのであって今はその再臨を待つ状況であるという認識に変化したのである。

進化を為す力は自然の内に存在するのか、外的支配によるのかという面から内村の進化観を見れば、進化そのものが神の力という立場に立っていたが、進化の現れ方については、やはり再臨信仰を抱くあたりから、ダーウィンの漸進的進化の肯定からド・フリーズの「突然変異説」採用へと変化し、進化の完成をキリストの再臨する時と規定したのである。我々は内村におけるダーウィンを中心にし

た進化論の影響の大きさを再確認すべきであろう。彼の生涯を見るとき聖書に示された神の摂理と、天然の進化の関係や、文明を進歩史的に捉えるか否かという問題は絶えず彼の内面に緊張関係を形成していたのである。

内村は「異端」という短文で「世に異端ほど貴い者はないのである、世に異端があればこそ進歩がある、預言者は異端であつた、イエスも異端であつた、パウロも異端であつた、ルーテルも異端であつた」（岩一六―七三）と述べているが、キリスト教と進化論を同時に受けとめた彼が、近代日本の中であえて信仰と科学を両立させる先駆者の道を選んだことも、日本社会における「異端」であるなら、両者の内にある真理を科学的に追求するために教会を捨て、一直線に真理と真理の神に向かったこともキリスト教界における「異端」の立場であったと言えよう。彼にとって科学の敵は「宗教」ではなく進化論を否定する「教会」であった。内村が「異端」の立場に立って真理を求め続けていたからこそ、彼は再臨信仰に基づく新たなる歴史観を見いだせたとも言えよう。

注

（1）浮田和民の「進化論ト有神論ノ関係」『六合雑誌』一八八四年が、弁神論的傾向を持つものの中でも特に優れていると思われる。

我々は日本における進化論の受容を考えるときすぐに、E・S・モースの名前を思い起こす。（モースの講義を筆記した石川千代松は内村の東京外国語学校当時の同窓生である）しかし、内村はほとんどモースに注目していない。内村が来日した進化論者で「英語国民間における三大進化論者の一人」（日五―二五四）と注目しているのはJ・T・ギュリックであったことは注目に値する。残された資料は少ないが、ギュリックと内村は意見交換をした形跡がある。

（2）キリスト教の創造説に矛盾する進化論の様々な学説に対し、内村は具体的にどのような態度を示しているかを簡単にまとめておこう。聖書は信仰の問題を解決する書であり、最新の科学成果を認めても信仰はゆるがないというのが彼の基本的態度であるが、地球創造を紀元前四～六千年前とするキリスト教の伝統的教理に対しては「我が信仰の表白」に於いて「余は聖書は一言一句悉く誤謬なき神の黙示とは信ぜざるなり其年代計算に於ては其歴史の記事に於ては其の人名の異同に於ては誤謬あることは慥かに認むるものなり」（岩一―二一六）と、最初から否定していた。「造化の教訓」においても「是は人類の救済の立場より見たる宇宙観である。創世記第一章が伝へんと欲する事は斯事である。故に此章を敢て科学的に研究するの必要は無いのである。天文学又は地質学又は考古学を引証して之を説明せんとするに及ばないのである。創世記は聖書の一部分であれば是れ亦聖書的に解釈すべき書（もの）である、即ち人類救済の立場より解釈すべき書（もの）である。故に『太初』とは万物の太初を云ふのではない、人類救済の太初である。」（岩二〇―二五〇）と、聖書に示された「太初」の意味を評している。

生物は神の創造以来変わっていないという考えに対しても

「近代における科学的思想の変遷」等に於いて一貫して進化の存在を肯定している。すなわち彼は「奇蹟の有ることは進化の宇宙に取つて必要である、是なくして宇宙は進化の宇宙でない、物質力中に生命が始めて顕はれし時に奇蹟があつた、植生の中に動物の始めて出し時に奇蹟があつた、動物の中に人類が始めて現せし時に奇蹟があつた、人類の中にキリストが生まれし時に、奇蹟があつた、常に推進する宇宙は常に新勢力を現出しつつある、是れ自己の起したる勢力ではない、新たに加へられた勢力である、……而して新たに勢力の加はるたび毎に奇蹟は行はるるのである」（岩一七―九三）と進化そのものを神の力による奇蹟と考えていた。また再臨を確信してからは、「造化は未だ完成に達していない。宇宙万物はその完成を待ちつつある」（岩二四―五一五）と述べている事からも解るように、キリストの再臨により万物の進化は完成すると考えた。

神が生物の形をデザインしたという説に対しては、「空の鳥と野の百合花」で「われら造化の美妙を見るに、ただその美を見るにとどまらず。桜花を見て喜び、ひばりの声を聞いて楽しむは不信者もなお、なすところなれども、信徒は造化を見て、造化にとどまらず、まさに造化の神を見るに至るべきなり」（岩一―三九五）（『六合雑誌』）と語り、肯定している。

人間は神に似せて創られた最終創造物ではなく、人間も一動物に過ぎないという考えに関して、彼は肉体的には、動物の中に内包するが「造化の教訓」で「造化の最後の目的は霊的実在者の出顕と其完成であつた、人は実に万物の霊長である」（岩二〇―二五四）と語るように、精神面では他の生物の上に立つものとして位置づけていた。進化論の歴史に関しては『進化思想の歴史上・下』P・J・ボーラー著　鈴木善次訳　朝日選書　一九八七年を参照した。創世記と内村の関係は、まだまだ興味が尽きないが今後の課題としたい。

(3) しかし、ベルクソンの哲学に内村の求める答はなかった。同年「聖書全部神言論」において彼は聖書無誤謬論的立場から「近日の東京朝日新聞は米国華府に於けるベルグソンの談話を伝へて言ふ『キリスト再臨のごときはこれを信ずるに能はず』と。ベルグソンは実に鋭敏なる分析力を有する現代の大哲学者である、然しながら惜しむらくは彼の著作中ナザレのイエスに対する尊敬を認める事ができない。」（岩二四―三七九）とベルクソンの内に再臨という視点がないことに失望している。内村は最晩年に至るまでベルクソンに興味を持ち続けるがベルクソンの『創造的進化』等によって、彼のキリストの再臨を中心とする歴史観に大きな変更は生じていない。なお、ベルクソンに関しては澤濱久敬著『ベルクソンの科学論』（中央公論社　一九七九年）を参考にした。

(4) その一例をあげるなら、内村はファーブルの昆虫生態学についても言及している。ジガバチ、ドロバチ、マグソコガネの行動様式をダーウィンの進化論によってどの様に説明するかという問題からも彼はダーウィンの進化論に疑問を抱いていた（岩三二―三〇七）。

(5) 内村の進化論および宇宙論に対する視点については松沢弘陽

氏の「内村鑑三の歴史意識」北大法学論集一七―四〜が詳しく参考になり、教えられるところが多かった。

その他、内村鑑三と進化論に関する研究論文には次のようなものがある。

道家弘一郎「内村鑑三と進化論」氷上英廣編『ニーチェとその周辺』朝日出版社　一九七二年
川喜田愛郎「内村鑑三の天然観」『内村鑑三研究』第二号　一九七四年
大内三郎「日本キリスト教史における進化論の問題―内村鑑三を中心にして」『東北大学日本文化研究所報告』第十四集　一九七八年
武田清子「進化論の受容方法とキリスト教」『文学』岩波書店　一九七九年

（千葉県立柏陵高等学校教諭）